『順番（じゅんばん）』

作者　淺羽　一

薄暗いバーのカウンターに体を預けるかのように細長いグラスを掴みながら、女は苦笑めいた表情から気怠げな吐息と共に声を漏らした。「良いことなんて、ありゃしない」。
やはり細長い指に絡みつかれたグラスの中では、溶けた氷が鮮やかな色彩の中に透明な層を作っている。幾らロング‐ドリンクスとは言え気になるのか、カウンターの向こうからバーテンダーがチラチラと女の手元に視線を走らせていたが、敢えて近付いてくることはなかった。「だって、ほんとぉについてないのよ」。女に相槌を打つかのごとく、またかすかな音を鳴らして氷の角が丸くなる。「仕事はトラブるし、そのせいでボーナスは無くなるし、男はいないし」。
「それなら、俺と付き合うと良いさ」
すると、女の隣りに座って、指先でつまんだロック‐グラスを宙に浮かせていたスーツ姿の男が冗談半分本気半分と言った感じで言った。すでにほろ酔い機嫌なのか、仄かに赤らんだその目は、大胆に露出された女の背中を楽しげに眺めていた。
「健康器具の販売だって？止めちまえ、そんな仕事。それより、俺の女になれば万事上手く解決さ」
女が体を起こさないまま、「どうして」と顔だけを男に向けた。酒のせいか、潤んだ瞳は扇情的で、男はますます愉快そうな顔になった。
「単純な話だ。幸運と不運は入れ替わり立ち替わりやって来るもんだが、今の俺は、猛烈についているからさ。そんな俺と付き合えば、贅沢も出来るし、寂しくもなくなる」
「そんなの、今だけじゃない」
すぐに興味を失い掛けた女を、男は即座に首を横に振ることで引き止めた。「いや、今だけなんかじゃ無いんだよ」。その声は自信に満ちて、確信に溢れていた。
「どうして、そんな事が分かるのよ」
「それも簡単だ。これまでが『苦』しかなかった分、これからはずっと『楽』ばかりなのさ」
そして男はこう言いきった。「俺はな、勝ったんだよ」。
女の眼差しが、僅かに興味深そうに細められた。「へぇ、何に勝ったって言うの」。
「聞きたいか」
男は言いたそうだった。
「聞かせてよ」
女は艶っぽい笑みを浮かべて促した。
「仕方ないな」
男は一度だけもったいぶるようにグラスに口を付けると、「絶対に秘密だぞ」と念を押してから、女の耳元に口を近付けて囁いた。「俺はな、完全犯罪を成し遂げたんだよ」。
くすぐったかったのか、小さく色っぽい悲鳴を上げて顔を離した女が、「あら恐い」と楽しそうに微笑む。「なら、あなたは犯罪者なの？だったら、こんな所で女を口説いていないで、早く逃げなきゃ」。途端、男は満足そうに頷いて、さらに話を続けた。「その必要は無いんだな」。
「それは何故？」
「言っただろ、完全犯罪なんだよ。罪になってないどころか、事件にさえなってないんだ。だから、俺は『犯罪者』じゃないのさ」

「屁理屈じゃない」
「でも、大金が手に入るのは間違いない」
「それは素敵ね」
「まぁな」
男は鷹揚に頷きながら、さり気なく女の空いている方の手に自身の手を伸ばした。
「だけど、本当かしら」
けれど女は自然な動作で男をかわすと、その手の指をグラスの縁に這わせて、「信じられないわ」と、誘っているとも取れる甘い声を出す。
男はそれに気を悪くするどころか、さらに情欲をそそられたらしく、「話を聞けば、あんたも信じるさ」と薄ら笑いを浮かべて断言した。
「俺はな、自分で言うのも何だが、親孝行な息子だったのさ」
「悪い人なのに？」
「悪くなったのは最近さ」
「ふ～ん。それで？」
「惚けて寝たきりの親父の介護をしながら、早朝と深夜に日雇いの仕事をして、親子二人で細々と暮らしていたのさ。どうだ、立派な孝行息子だろ」
男の口調は冗談めかして軽いものの、言っている内容に嘘は無さそうな雰囲気で。女はただ「そうね」と相槌を打って続きを促した。
「でもな、ある日、気付いちまったんだよ」
「何に気付いたの」
「俺はこのままじゃ、親父に食いつぶされて終わっちまうんじゃないかってな。親父の為に日銭を稼いで、親父の為におむつを買って、親父の為に食事をこさえて、そんなのはもう俺の人生じゃなくて親父の人生の代役をしているだけだろ」
そして男は「だから、今度は俺が人生を楽しむ番だって、気付いたんだよ。俺には十分に、その権利があったからな」と、少しばかり声の調子を低くした。
「それで、まさかお父さんを殺しちゃったの」
「人聞きが悪いな。順番が回ってきたのさ。不運続きの俺に、やっと幸運の番がな」
「でも、どうやって」
女の問いに、男はたっぷりと間を置いてから、「まずはな、ベッドを買ったんだよ」と囁いた。
「ベッド？」
「そうさ。介護用の、電動式のベッドだ。マットの下にモーターがあって、リモコンのボタン操作だけで姿勢を変えられるってタイプのな。ちょっとばかり値が張ったが、それくらい先行投資と思えば可愛いもんさ」
「それでそれで？」
ドラマの推理劇でも期待しているみたいに、女の目が大きくなる。「それでまぁ、当分の間は、それまで通りさ」。男は小鼻をひくつかせながら、「計画は慎重さが重要なんだ」と知能犯を気取ってその目を覗き込んだ。
「それからしばらくして。買い置きの紙オムツが切れた、その日、遂に計画は実行されたのさ」

「どんな計画だったの」
「簡単だよ。俺がしたことは二つだけ。リモコンからベッドに伸びるコードの一部をほとんど分からないくらいに傷つけた事。もう一つは、寝る前の親父にいつも以上に水を飲ましてやったのさ」
「それだけ？」
女がキョトンとした顔をする。しかし男はそれに、「それだけで十分だったのさ」と笑って応えた。「次の日、起きたら親父は死んでいたよ」。女の目が、驚きに丸くなり、それを見た男の目は細くなった。
「感電したのさ」
「感電？」
「あぁ。夜中、オムツ無しで大量に漏らされた小便が、コードの切れ目に触れて、そこから電流が伝わったんだよ」
それはあまりにも呆気なく聞こえる真相だったが、しかしだからこそ完璧な構造だった。
「勿論、警察だって来たけどな。状況は完全に事故だし、傷つけた配線の部分だって、ショートした時に焦げちまって、俺の仕業だなんて誰も気付きやしなかったさ」
しばらくの間、女は唖然とした様子で口を開けっぱなしにしていた。だが、時と共にその顔から強ばりは消えていき、やがてついには満足した風に笑みを取り戻していた。「何て言うか、驚いたって言うか、呆れたって言うか、微妙だけれど、賢い方法ね」。そして彼女はその「完全犯罪者」に向かって艶やかな視線を送る。
すると男は「それだけじゃないぜ」と、むき出しの女の肩に手を伸ばしながら、「そのベッドを買った会社を訴えたんだよ。お前んとこの欠陥商品を買ったせいで、俺の大切な親父が死んじまったじゃねぇか、ってな」と言った。今度こそ、女は男の手から逃げなかった。男の手が無遠慮に細い肩を掴む。「結果、訴えは受け入れられて、見事に慰謝料もがっぽり。向こうさんにしてみれば、あんまり表沙汰になっても困る話だろうしな、来月にも口座に振り込まれるって寸法よ。こうして、晴れて俺は自由と大金を一挙に手に入れたってわけさ」。
男は抱いた女ごと体を揺すって笑うと、女の顔に口を近付けて言葉を紡いだ。「どれだけついてなかったのか知らないが、あんたにだって、順番が回ってきたんだよ。何せ、こうして俺と出会えたんだからな」。
女がグラスから手を離し、それを自身の肩に触れる男のそれに重ねた。「本当ね」。それから男の方に体をすり寄せる。「あなたって、最悪ね」。
「褒め言葉かい」
「勿論よ。だって、あなたのおかげで、ようやく私にも幸運が巡って来たんですもの」
「人間、真面目に生きてりゃ良いことがあるもんさ」
男はそんな揶揄に自ら笑うと、「この後、良いだろ」と囁いた。
女はそれに焦らすように少しだけ黙ってから、「お化粧を直してきて良いかしら。まだまだ夜は長いんですもの」と、艶やかな唇を見せつけるみたいに妖しい弧を描いた。言うまでもなく、男の返事は決まっていた。
やがて女は「待っててね」と猫なで声で言い残し、バッグを掴んで店の化粧室へと入っていった。

だが、それから十分近くが経過しても、女は戻ってこなかった。「遅いな、いつまでやってんだ」。男は苛立たしそうな呟きを漏らして、急かすように化粧室への扉を睨むが、それでも立ち上がって扉を叩こうという気はないらしく。プライドと期待の狭間でじりじりしながら、男は女が席を立ってから注文していたウィスキー‐オン‐ザ‐ロックの残りを煽る風に飲み干す。

と、そこへようやく「お待たせ」と、丁寧に化粧を整えた女が戻ってきた。

「遅いじゃないか。俺が恐くなって逃げ出したのかと思ったよ」

指先でつまんだロック‐グラスを宙に浮かせていた男が、冗談半分本気半分と言った感じで言った。ずいぶんと赤くなったその目は、先ほどまでよりも強調された女の胸元を今にも舐めんばかりに眺めている。

「まさか。こんな素敵な偶然を棒に振るなんて、するはずないじゃない」。女は嬌笑を浮かべて、心から幸運に感謝しているという雰囲気の声音で言った。「それより、もう一杯くらい飲んでから行きましょうよ」。

けれど男はいい加減に待ちきれなくなっているのか、「いや、とりあえず先に行こう。酒はまた、後でゆっくりと飲めば良いじゃないか。夜は長いんだろ」と、さっさと会計を済まして席を立とうとした。

しかし、そこへ…。

「いらっしゃいませ」

軽やかな鈴の音が鳴り、新たな客が入ってくる。それはスーツ姿なのにスニーカーを履いているという、少しだけ変わった格好をした二人組の男達だった。彼らは頭を下げたバーテンダーを無視すると、真っ直ぐに男と女の方へと歩み寄ってきた。

「失礼、あなたですね」

二人の男の内、年配の方の片割れが女に向かって唐突にそんな事を尋ねた。

「えぇ。この人がそうです」。女はまるで驚いた素振りもなく、それどころかむしろ待っていたとでも言いたげに自然な仕草で傍らの男を手で示す。二人の男の内、残った方が、女と男の間に割り込むように進み出た。

「な、何だ」

突然の事態に怒るよりも戸惑う男に対して、年配の男がボソリと何言かを耳打ちした。直後、電流でも通されたかのごとく、男が背筋を伸ばして動きを止めた。

「ごめんなさいね」

そう言った女は、悪びれているどころかいっそ笑い出しそうな雰囲気だった。「悪く思わないでね。あなたの言った通り、順番が回ってきただけなのよ、きっと。だって、本当に素敵な偶然なんですもの。まさか、こんな場所であなたみたいな人に出会えるなんて」。

そして女は声もなく振り向いてきた男に向かって、バッグから一枚の名刺を取り出し、慇懃無礼に差し出した。名刺には、男にとって見知った会社の名前が記されていて、女の肩書きはそこの営業・販売担当となっていた。

「健康器具とか、介護用品とかの販売をしている会社なんだけど。最近、私達が売った商品で問題が起こって大変だったのよね」

呆然と立ち尽くす男の胸ポケットに名刺を滑り込ませた女は、何とそのまま唇を滑らせて男の頬へと触れさせた。「だけど、あなたのおかげで何とか解決出来そうだわ。しかも、

これで私の査定もアップするでしょうし、ボーナスだって期待出来るわよね。彼氏だけは、どうだか分からないけど」。それから女は男から身を離し、「だから、今のはせめてものお礼よ。」と微笑んだ。本当に、混じり気のない嬉しそうな微笑みだった。

「それじゃ、署までご同行願おうか」。女と入れ替わりに男へ近付いた年配の刑事が、ニヤリと口元を歪ませて言った。

「今夜は、長い夜になりそうだな」

刑事の手が、ガッチリと男の肩を掴んでいた。

〈了〉